第 85 回カルチャーセミナー

「映 画 の 歩み」

柿生郷土史料館　小林　基男

★　20 世紀前半期　映画は大衆文化の華、娯楽の王様の地位にあった。⇒　その映画はどのように誕生したのか

１．映画誕生の経緯

★　誕生　⇒　1889 年、アメリカでトマス・エジソンが、箱に仕掛けたロール・フィルムの回転を接眼レンズで覗いて見るキネストコープを完成。

⇒　この機械が硬貨を投入すると作動する装置を工夫、94 年にニューヨークで公開した。１セントで１分見られる。大人気を博した。

しかし。この装置は、１人が箱の中に入って、レンズに目を当て覗き見ることしかできない。スクリーンを一度に多人数が見る装置ではなかった。

★　箱からの解放　⇒　フランスのリュミエール兄弟発明のシネストコープ

現在の映写機と基本的な機構がほぼ同じ。箱に投射するのではなくスクリーンに投射し、一度に大勢が見ることが出来るようにした。

★　エジソンも少し遅れて、スクリーンに投射するヴァイダスコープを開発した。

★　どちらも 19 世紀前半に完成さえた写真技術を、動くものの記録と再現に応用して実現した。そのため初期の映画は、動く写真＝活動写真と呼ばれた。日本でも戦後 1950 年代では、年配者は、映画館に出かけることを、活動を見に行くと言っていた。

当然、映画館は活動小屋である。

★　最初の映画は、いずれも１分足らずの短いもので、どれもワンシーンで出来ていた。

リュミエール兄弟、1895 年 3 月、パリで開かれた科学振興会で公開。同年 12 月 28 日にパリのカフェで（グラン・カフェ）有料の試写会を開いた。しかし、１本の映写時間は１分に満たない。そこで、１回の開催に最低 10 本程度の作品を提供しなければならない。兄弟が公開したフィルム群は、「列車の到着」や「工場の出口」、「水をかけられた散水夫」など、12 本だった。現存する最古の映写フィルクとされる「ラウンドヘイの庭の場面」もその一つである。

このうち「列車の到着」というフィルムを見た観客は、近づいてくる列車を見て、驚いて腰を浮かしたと、当時の新聞が書いています。

……

★　アメリカのエジソンも、少し遅れてヴァイタスコープを完成。1896 年、ニューヨークで初公開。最初は幕間の座興程度だったが、やがて専門の劇場が出現します。これが入場料５セントの「ニッケル・オデオン」であり、伴奏用のピアノ備えていた。

★　１分から 10 分へ　フィルム技術の成長。１巻で 10～10 数分の撮影が可能に…

その結果、場面のカット割りが可能になる。

長編の最初の作品、フランスの『月世界旅行』(1902 年)、ジュル・ヴェルヌの原作の映像化。最初の SF 作品でもある。

アメリカでは、1903 年制作の『大列車強盗』全 14 カットの 12 分の活動写真。

どちらも、大好評を博して、より長いものを目指すようになる。

こうなると、フィルム同士を繋ぎ合わせてより長時間の映像を作ろうということになる。そこで、映写機の長いフィルムを収め、巻き取ることが可能な大型の巻き取りリールや、そうしたリールを装着できる映写機が必要になる。⇒　映写機の大型化。

★　日本への導入
1896 年 11 月　⇒　神戸の神港倶楽部で、エジソン発明になる「キネトスコープ」方式で一般公開。97 年 1 月には、京都でシネマトグラフによる上映会が行われた記録が残されている。
⇒　当然、当時の日本人に、映写機の操作はできないので、いずれの上映も、エジソン社とリュミエール社の技師が操作を担当した。
★　日本での撮影　⇒　フランス製カメラを使い、失敗を重ねながら、2 年がかりで撮影に成功。「浅草仲見世」、「芸者手踊り」などの実写フィルム 11 本を製作。1899（明治 32）年 7 月 20 日から東京歌舞伎座で公開された。歌舞伎公演の前座の扱いであるが、映写には劇場が絶好であるとの認識が広がる契機となった。

２．活動写真から映画に
★　米国映画「国民の創生」の登場。⇒　新しい表現を求めた若い映画人の登場　⇒彼らは因習を嫌って西海岸に移住。ハリウッドを根拠地に定めた。
その中の 1 人、D、W,グリフィスが「国民の創生」を撮る。1915 年 2 月公開。165 分。
★　この時期、ソ連に世界最初の映画学校が誕生する。そこからエーゼンシュてインらが登場する。
★　トーキーの登場　⇒　ここまでは無声映画の時代。世界初のトーキーは、1927 年公開のアメリカ映画『ジャズ・シンガー』。まだ映画全編ではなく、部分的なトーキーだった。以後、世界各地でトーキーが主流になってゆく。
★　トーキー化の初期、1928 年にディズニーの短編アニメ『蒸気船ウィリー』が公開され、ミッキーマウスとミニーマウスがデビュー。最初のサウンドトラック方式採用映画でもあった。チャップリンはこれより前に登場。トーキー化に背を向けていた。
★　このころフランス映画も全盛期を迎え、ルネ・クレール、ジュリアン・デュヴィヴィエらが登場、フランス文芸映画の黄金時代を作り上げた。
★　アカデミー賞（1929 年）やヴェネツィア国際映画祭（1932 年）の誕生
★　カラー作品の登場。ディズニーの最初の長編アニメは、世界初の長編カラーアニメとなった『白雪姫』(1937 年公開)。超のつく大ヒットとなった。39 年制作の『オズの魔法使い』は、モノクロとカラーの両方で撮影され、同時に公開された。ただ興行的には振るわなかった。同年公開の『風と共に去りぬ』は全編 225 分の長編テクニカラー。製作費に 400 万ドルの巨費を使ったが、空前の大ヒットとなり、世界全体での観客動員数は 20 億人に達した。日本での公開は、昭和 28 年（1953 年)。ここにカラー映画時代が本格的に幕を開けた。

３，日本映画の歩み
★　日本映画の黄金時代は、大正デモクラシーの雰囲気の下で成長した自由な雰囲気がなお残っていた昭和一桁の時期（1926～35 年）と廃墟からの復活が進み、占領軍支配からの独立が達成され、今後に明るさが見えだし、中産階級の裾野が広がり続けた昭和 27（1952）年～昭和 37(1962)年の 2 度だった。
★　日本で最初の映画専門館は、明治 36（1903）年に吉沢商店が浅草に設置した。この映画館は、浅草が日本の大衆的モダニズム文化の中心になってゆくことに、大きな役割を持ったと指摘されている。
★　日本映画の特徴。演劇と音楽のお世話になって成長したこと。
⇒　映画館が今でも〇〇劇場とか〇〇座と名付けられていること。業界人は小屋と呼び合っている。歌舞伎や人形浄瑠璃の影響が大きい。戦前の時代劇俳優の所作は、歌舞伎役者を真似ていた。⇒　初期の映画俳優に女優は存在しなかった。女形が担当した。
⇒　女優の出現は、大正時代に入ってからになる。歌舞伎興行しか手掛けなかった松竹が映

画に関心を持ち、蒲田に撮影所を設け、別に俳優養成所を開設。新人俳優の発掘に乗り出した。ここから本格的な女優が誕生。『虞美人草』（1921 年公開）に主演した栗島すみ子が、最初のスター女優と称された。

⇒　活動弁士の存在も独特。諸外国では無声映画は、すべて字幕で対応。弁士は存在しなかった。日本では弁士が大活躍。講談や漫才、人形浄瑠璃の存在が、弁士の語りに観客が違和感をもたなかった。大都市では、観客は誰が弁士を務めるかで、劇場を選ぶことも多々あった。

⇒　日本映画にカメラの長回しが多いのは、弁士に自由に語らせる時間を作る意味合いもあった。

★　戦前の絶頂期は、無声映画がトーキーに移行する過程で生じた。トーキー革命は小規模なプロダクションが設備投資ができないことで消滅するのに役立った。松竹、日活（日本活動写真を略して日活と呼んでいた）、東宝の 3 社と、遅れて参加した大映の 4 社。独立プロは、特に要請があった場合に 1 本ずつ請け負う下請け的存在になった。

★　戦時体制下では、撮影は少なくなり、監督や俳優たちは、戦地や弊社などへの慰問活動が中心となり、兵役に就く人も多かった。

★　戦後の占領期は GHQ の検閲が厳しく、チャンバラ映画はご法度が続いた。

★　この時期に特筆すべきことは、1946（昭和 21）年から数次にわたった東宝争議。第 2 次争議の過程で、ストには反対だが会社側も支持できないと表明した大河内伝次郎、長谷川一夫、入江たか子、山田五十鈴、藤田進、黒川弥太郎、原節子、高峰秀子、山根寿子、花井蘭子の 10 人のスターが「十人の旗の会」を結成して組合を離脱。監督の渡邊邦男らも同調。賛同した組合員も加えて、昭和 22（1947）年 3 月、新東宝を設立したこと。新東宝で映画の撮影を続けたが、上映は東宝の専門館を借りていた。

★　戦後の映画会社、最大規模日本活動株式会社（略称日活）は、解体されて復活できず、まずは、松竹、東宝、大映の 3 社で出発。そこに新東宝が加わり、GHQ の占領統治が朝鮮戦争との関係もあって、ハード路線からソフト路線に変更されて、時代劇への規制も緩んできたことから、新たに旧日活の時代劇スターを迎えて東映がスタート。5 社となった。

★　五社協定　日活の映画界への復帰の動きを睨んで、5 社は、日活による俳優や監督の引き抜きを警戒して、五社協定を締結したが、5 章 15 条からなる協定は秘密として、5 社の社長以外には、社内でも伏せられていた。

内容は、5 社の専属の俳優や監督の引き抜きを禁止することと、俳優・監督の他社への貸し出しも、今後は禁止する。この 2 点は明らかになっているが、専属俳優が社をやめてフリーとなった場合。互いにその俳優を使わずに干してしまう効果を発揮した。

★　この協定で、引き抜きの道を絶たれた日活は、やむを得ずニューフェースの登用に切り替え、それが思いもかけず大ヒットとなって、長門裕之、石原裕次郎、小林旭、赤木圭一郎、津川雅彦、宍戸錠、北原三枝、浅丘ルリ子、和泉雅子らの新スターを発掘。新しい映画ファンを開拓することに成功した。

★　時代劇では、片岡千恵蔵、市川歌右衛門、大河内伝次郎、長谷川一夫、嵐寛十郎らの大御所に加え、三船敏郎、中村錦之助、東千代之介、大川橋蔵、市川雷蔵、松方弘樹、勝新太郎、北大路欣也あの新スターが誕生、一世を風靡した。

★　各社は、昭和 29（1954）年から、一斉に 2 本立て興行に踏み切り、毎週 2 本ないし、2 週で 3 本の新作を公開する体制を作った。

★　国内で最高の制作本数は、昭和 35（1960）年の 547 本。その内 93%が日活を含む 6 社の制作だった。観客動員の最高は、33 年（1958 年）の 11 億人。

★　映画の退潮は、テレビの普及と共に進んでゆく。

……

「ラウンドペイの庭」の場面（1888 年）

「ラ・シオタ駅への列車の到着」の宣伝ポスター
1896 年 1 月 25 日にリヨンで公開　上映時間 50 秒
リュミエール兄弟制作・監督
彼らのカタログ番号 653

シネマトグラフ（リュミエール研究所）

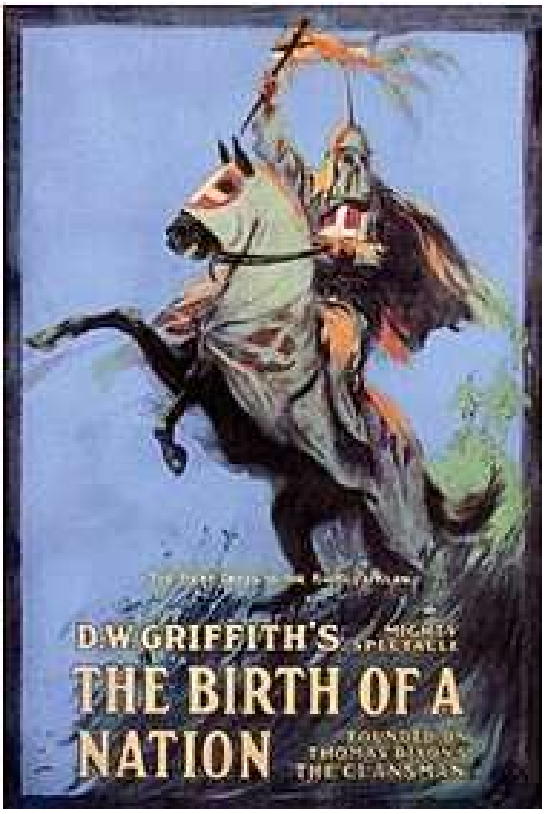
右が映写装置手回しでフィルムを下に送る
左が光源の幻灯機

「工場の出口」（46 秒）1895 年 12 月 28 日パリで公開

「月世界旅行」のスタート　1902 年 9 月 1 日公開、フランス（16 分）
物語構成と複数のシーンで構成された世界最初の作品、
監督はジョルジュ・メリエス。最初の映画作家。

「大列車強盗」の場面　1903 年 12 月 1 日公開、
アメリカ、エジソン社制作　ワンシーン、ワンショットで 4 シーン。
上映時間 12 分　大ヒット作品となり、ニッケルオデオンと呼ばれる入場料セントの映画館の第 1 号がペンシルバニアに誕生した記念に公開された。ここから各地にニッケルオデオン（常設映画館 9 が続々と誕生する。

「大列車強盗」　強盗にピストルを突き付けられて歩く機関士



最初の長編映画『国民の創生』（上映時間 165 分）　　国民の創生の 1 シーン
米国　1915 年 2 月公開　日本では 1924 年公開
全世界での興行収入 1 千万ドル、米国内 300 万ドル

「風と共にさりぬ」のポスター　1939 年公開
まずは作品の舞台のアトランタで、その後全米。
全世界へ　日本では 1952 年公開　上映時間 222 分
主演　ヴィヴィアン・リー、クラーク・ゲーブル
観客動員　20 億人